

大事なものは好きがある
毎日です

昼瀬七

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

失踪前提で始めます。曜ちゃんがヘタレなのは世界の常識まである。

目次

最初はできないことだらけ	1
ダメで元々だつて	8
まずは風の向いた方へ	14
君のヒカリ 手に入れたい	21
気楽に sailing	32
笑わないよ	37
頑張つたと言えるように	44
想像以上のトキメキへ	50

最初はできないことだらけ

「ちかー、置いてくよー？」

「ああつ、待ってよひーちゃん！」

「陽菜ちゃん、もうバス来るよ」

「待ってって、間に合ったから！」

「ギリギリ。もう高校生なんだからいい加減にしてよね」

「でも、なんだかんだ待っててくれるでしょ？」

ニイツと笑った千歌の顔は、本当に太陽みたいだなんて思う。それが寝坊をした上で人を待たせた笑顔じゃなければの話だが。

ネチネチと説教をしながらバスに乗り込む。聞いているんだか聞いていないんだか、千歌はそんな態度でさっさと座ってしまった。

私がよく座る席。それは奥に陣取る幼馴染の隣。元気よく挨拶をしてくれた彼女の横のその席。

「おはよ、曜ちゃん」

「おはヨースロー、ひーちゃん」

千歌とはまた違う笑顔。ふわりと笑うその顔が私は好きで、だからこそ、自然と曜ちゃんの隣が私の特等席になった。千歌が珍しく気を使ってくれているんだから、感謝しないよね。

私、七海陽菜は、千歌と果南と、それから曜ちゃんの幼馴染である。とは言っても、私は3人の後ろについて歩いていただけだった。みんなみたいに運動神経が良いわけじゃないし、友達いないし。

「ひーちゃん、大丈夫？」

「え？」

「元気なさそうだったから。どうかした？」

「別に……何かあったわけじゃないよ？」

「それならいいんだけど。何かあったら話聞くから、いつでも言ってね」

「優しいね。でも夜遅くの電話に出てくれるのかな？」

「うっ……」

「なーんてね。今のところ特になにも思い当たらないから、私から相談するまで待つてよ」

「絶対だよ？ ひーちゃんすぐ溜め込むんだから」

「曜ちゃんには言われたくないなあ」

ふふっと口から漏れる笑い声。軽口に対して柔らかい笑みを浮かべてくれるの、本当に好き。

やがて私の左隣に座っていたヨハネが、私の肩に頭を預けて眠り始める。夜更かしでもしていたのかな。

「……善子ちゃん、寝てるの？」

「うん、そうみたい。甘えてもらってるのかな、ちよつと嬉しいかも」

「ふーん……ねえ、変わろっか？」

「へ？なんで？」

「いやほら、体勢とかキツイかなって。それに私、ひーちゃんよりは鍛えてるから、支えられるし」

「大丈夫だよ、ヨハネが起きちゃうかもしれないしね。こう見ると可愛い後輩なんだけど」

「……じゃあ、右肩は曜ちゃんが借りるであります」

「ちよつ、どうして。眠いの？」

「んー、そんな感じ。ね、ひーちゃん……いい？」

甘えるようにコテンと首を傾げる曜ちゃん。ドキリと胸が高鳴ったのがバレたくなくて、慌てて頷いた。なんでそんなに可愛いことするかな。人の気持ちも知らないくせに。違うか、人の気持ちを知らないからこそ、思わせぶりな態度を取るんだ。

やがて右肩にも同じような重さがかかる。よくもまあ揺れるバスの中で人の肩を枕

に眠れるよこの人たち。ドキドキと鳴る音が、曜ちゃんにもヨハネにも、聞こえていま
せんように。

ダメで元々だって

ふふつ、そんな柔らかい笑みがすぐ傍から零れる。私の耳が捉えていた先程までの会話からきつと、陽菜は曜への愛しさを目いっぱいに噛み締めているのだろう。先に甘えたのは私なのに、ちよつとくらい私へと向けてくれたつていいじゃない。

そんなワガママは当然言えるわけもなく。さらに言うなら、私はこのまま狸寝入りを続けなければいけない。でも少しだけ、陽菜が私のことを気にしていないのなら、そうなるように手を握る。あくまで、寝ている無意識で取った行動のように、自然と。

今度はもう何のアクションも起こらない。まさか、この数秒で寝たとか言わないわよね？

私の不安を嘲笑うかのように、前の方から名前を呼ばれる。リリーの声と、どこか楽しそうな千歌の声。

「善子ちゃん、2人とも寝たよ」

「寝たフリ、よく陽菜ちゃんにバレなかったね？」

「あんたたち……気づいてたのね」

「だって手、握ってたでしょ。やりすぎ」

「うぐっ……だって！陽菜が私に気づかないのが悪いのよ。こんなに近くにいるのに……曜のことばっか」

安らかに眠る陽菜の顔がすぐ近くにある。それだけでも少しだけドキリと音を立てるんだから、恋ってものはつくづく私を馬鹿にしてくれる。

梨子と千歌は、まだ私たち3人を見てる。曜に甘えられて喜んだ緩い顔のまま眠る陽菜と、同じように緩んだ顔で眠る曜。私からは見えないけど、どうせそんな顔してる。両片思いに首を突っ込むだなんて、私も物好きだ。

出逢った時から、陽菜は曜のことが好きだったのに。

「……善子ちゃん、朝からそんな暗い顔ダメだと思うなー？」

「余計なお世話よ。だったら千歌、あんたが幼馴染として陽菜に私のことでもプレゼンしておくくらい……」

「無理だよ。チカは善子ちゃんの仲間で先輩で友達だけど、曜ちゃんとひーちゃんの幼馴染だから」

いつになく真剣な顔で即答される。そんなこと、いちいち聞かなくたって答えてもらわなくたって知っている。理解はしているけれど、何よりも認めたくない。曜からしたら私はライバルなのかもしれないけれど、私は同じ土俵になんか立てていないんだから。

ため息をつく。気分が晴れるなんてことはない。

「……善子ちゃんはさ」

「千歌ちゃん？」

「向けられてる好意にも気づいてあげてもいいんじゃない？」

「何を言ってるのよ」

「振り向いて貰えない辛さ、知ってるでしょ？」

「そうだけど……」

「……千歌ちゃん」

「私は恋とか分かんないけど、誰かが傷つくのは嫌だから。見て貰えないだけじゃない、誰かが見てくれることに気づいてあげてね」

ふんわりと笑うその顔は、陽菜がよくする顔と似ているような気がした。長いこと一緒に居るとふとした仕草が似てくるのだと聞いたことはあるが、もしかしたら3人はそうして成り立って来たのかもしれない。

たまには先輩らしいところあるんじゃない。そう皮肉を返して、それからありがとうと
呟いた。からかうような視線も言葉も無く、千歌はただいつものような太陽の笑顔で
「どういたしまして」と言うだけだった。

まずは風の向いた方へ

『週末、練習の後空いてる？』

ピロンと軽い音を鳴らして届いたのは、曜ちゃんからのそんなメッセージ。普段は通話だったりするから彼女との会話の履歴は1ヶ月前で止まっていた。珍しいと思いつつも、空いてるとだけ返信をする。すぐに既読はつき、曜ちゃんが私の返事を待たせてくれたことが分かる。それだけでも嬉しくなるんだから、本当に単純だ。

「陽菜ちゃん？どうかした？」

「曜ちゃんからメッセ。練習の後空いてるかって。いつもはそんなこと聞かないで一緒に帰るのに」

「へえ……珍しいね。あ、曜ちゃん次送ってきた」

「……これって」

『デート、しませんか』

簡潔に伝えられたその一言が、私にとっては何よりも嬉しくなれるような魔法がかつてる。曜ちゃんがかけた魔法。なんて返信しよう。慌てた頭で送った文章は、『行きたいです！』だった。

隣で梨子が笑っているのが分かる。顔に熱が集まって、なんだかクラクラしてきた。

「ふふ、陽菜ちゃんにしてはテンション高い文章になったね」

「からかわないですよ。だって……嬉しいものは、嬉しいもん」

「そういうところ、本当に可愛いと思うな」

「もう、置いて帰るよ？」

「待つて。もう少し私と一緒に居てよ」

「何それ、告白みたい。言われなくても家まで送ってくよ、私が梨子を置いて帰るわけないじゃん」

「……陽菜ちゃん、ずるい」

「なにが」

なんでもないとはぐらかされ、2人無言のまま歩く。どちらも自分から話すのは苦手で、だからこそ今の距離感のまま親友を自負している。幼馴染で私だけ仲間はずれの気分を味わっていたのは、梨子が浦の星に来てスクールアイドルを始めてくれる前までだ。

「にしても、曜ちゃんとデートね」

「嬉しそうだね、梨子」

「うん、陽菜ちゃんのこと応援してるから。それに……私も頑張らなくちゃって、勝手に
勇気貰えるの」

「そっか。私も梨子のこと応援してる。とりあえず帰るよ。風邪引いたら怒るから」

「もう、子供じゃないのに」

「どうだか。ほら、早く」

差し伸べた手を大人しく取ってくれて、梨子は私の隣を歩き出す。まだ砂浜を歩き慣れない彼女を支えるようにして階段まで戻る。海は嫌いだけど、梨子の楽しそうな横顔が見れるのなら頻繁に来てもいいかもしれない。

それはそうとして。

「……曜ちゃんとのデート、何着ていこう？」

「私はそのクールな格好好きだけどな。ダメなの？」

「梨子が綺麗な服装で来るからこういうコーデにしてるんだよ。今までも休日出掛けることはあったけど……改めて誘われると、可愛い私を見て欲しいじゃん」

「そっかあ……」

「買いに行く時間もないし、ヘアスタイルのアレンジとか染めるくらいしか思いつかな
うぞや」

「……そんな簡単にヘアカラー入れようと決心するの？」

「ダイヤに怒られようかねえ？あの人、なんだかんだ私に甘いから」

「自覚がある分タチ悪いよ」

「薬局行って帰ろ」

「家もうすぐそこなんだけど。ていうか本当に染めるの？」

「買ってから決めても遅くはないでしょ？」

「……その行動力、千歌ちゃんに似てるね」

君のヒカリ 手に入れたい

「千歌ちゃんどーしよ〜!!」

「どうもしないよ、曜ちゃんが誘ったんだし。人の部屋に上がり込んでまで泣き言言うとか、ヘタレ過ぎだよ?」

「だってだって、めっちゃ楽しみにしてたじゃん! あんなに浮かれてるひーちゃん見たの久しぶりでしょ?」

「それだけデート楽しみにしてたってことじゃんか。ていうか……あの反応で気づかないの、控えめに言っただけだからね」

何やら失礼なことを言われたような気がする。気づかないふりをしてまたクツシヨ

ンに顔を埋めた。そろそろデートの時間。私が彼女を家まで迎えに行くことにしてある。呆れ顔をしたみかん色の幼馴染に行ってきますと告げ、適当にあしらわれる。ひーちゃんが関わった情けない私相手の千歌ちゃんはなんとというか、雑な対応だ。

千歌ちゃん家である十千万から七海家まで、1分もかからない。その距離を鳴り止まない心臓を抑えてゆつくりと歩く。出来るだけ焦った姿は見せたくない。カツコつきたいんだと思う。私ってばほら、単純だからさ。

インターホンを鳴らす。数秒ほど経って室内からは軽い足音が聞こえてきた。ひーちゃんかな。もしかして待っていてくれたのかな。だってあんなに楽しみにしてくれていたもんね。

「おはよう、曜ちゃんっ」

「おはヨーソロー、ひーちゃん。お待たせ」

「ううん、待つてない。ねえ、今日はどこ行くの?」

「水族館。ひーちゃん好きでしょ?」

「好き」

へによりと笑うその顔とセリフにドキリと胸が鳴る。落ち着け渡辺曜。好きと言われたのは、行き先である水族館だ。決して私のことなんかじゃない。だからお願いしま
す、ひーちゃん。自惚れてしまうからニコニコしないで。可愛いけど。

「曜ちゃんと遊びに行くの、久しぶりだね」

「あれ、そうだったかな？」

「千歌も一緒だったから。2人でどこか行くのは、高校に入学する前だから、久しぶりだよ」

「よく覚えてるね……」

「ふふ、結構そういうの覚えてるタイプなんだよ。千歌や曜ちゃんは忘れちゃうんだろうけど」

「私も覚えてるつもりなんだけどな。ひーちゃんと一緒だと全部上書きされちゃうのかも……」

「……そっかあ。楽しんでくれてるんだ？」

「うん、もちろん！どうしたの、急に？」

「なんでもないっ」

私から目線を外し、真つ直ぐ前を向くひーちゃん。その頬はほんのりピンクに染まっています、幸せそうな顔をしている。初めて見た、そんな大人びた表情。私がいつもドキドキし過ぎて見れていないだけなのかなあ？

それはそれで情けない気がしてならない。ネガティブな考えは首を振って追い出して、それから彼女の手を取った。自他ともに認めるヘタレな私にしてはよくやったと思う。ひーちゃんの顔を直視できない代わりに言い訳を。

「…………デートだしこれくらい、してもいい？」

「う、うん……もちろん……？」

どうか神様。ひーちゃんが不思議そうな顔をしていないことを祈るばかりだ。

ああやって無邪気な笑顔を浮かべられると、勇気を出して誘った甲斐があったというものだ。暗い室内に水槽の青と彼女の白いワンピースは言い表せないくらい綺麗で。振り向かれる前に、1枚だけ写真を撮った。

ガラス越しに見るこの景色は、ひーちゃんの大好きな景色だ。海が嫌いというより、水自体に濡れることを好まない彼女はそれでも、神秘的な風景を良く眺めていることを知っている。連絡船の上でも、水平線を追うように静かな横顔は、私と千歌ちゃん、それから果南ちゃんの宝物。

「曜ちゃん見て、ペンギン」

「やっぱりこうやって見るとちよつとだけ迫力あるねえ。可愛いけどなんていうか、こ
う、ぐわーって感じ」

「絶妙に伝わってこないんだけど……?」

「あつ!あの子ひーちゃんに似てる!」

「え、どこ?」

「ほら、あそこ。影になるところでみんなと離れてる子だよ」

「言われてみれば……似てるかも……?」

「そっくりだよ。だってほら、あの子の隣にいる元気な子とか千歌ちゃんでしょ」

「じゃあその後ろが曜ちゃんか。本当だ、なんだか私たちみたい」

「お土産はペンギンに決まりかなあ」

「そうだね。写真撮っていいこう、千歌にも見せよ」

珍しく彼女にねだられ、ペンギンとひーちゃんを同じ画角に写す。幸いにも私たちが3人にそっくりな子たちは動かずにくれたからシャッターチャンスだ。キラキラな瞳が幼子のように、思わず何枚も撮ってしまう。頬を膨らませて不満を訴える彼女に袖を引かれ、2人とペンギン、全部写すことに。

「ひーちゃん？」

「んー？」

「これじゃペンギン、写らないんじゃ……」

「……曜ちゃんは、私とツーショットじゃ、イヤ？」

上目遣いに首を傾げられたら、断れない。勢いよく首を横に振って、それから少し彼女との距離を詰めてみた。これじゃあ綺麗には撮れない。ほんのり頬を赤く染めたひーちゃんもまた、少し私に近づいた。ゼロ距離に誰かがいるのには慣れている。相手が千歌ちゃんでないにしろ、そういった振り付けがあるくらいなのだから。

だけど、隣のこの子だけは心臓が鳴り響く。はち切れてしまいそう。

「と、撮るよ……」

「うん……」

3秒のカウントと共に聞こえたシャッター音。弾かれるように2人同時に距離を取った。それから互いの顔を見合い、気まづさを打ち消すように笑った。緊張していたのは私だけじゃない。ドキドキしていたのは私だけじゃない。

意識しているのは、ひーちゃんもまた一緒だ。

撮ったばかりのツーショットをひーちゃんに送り、それから設定を弄る。待ち受け画面は私たち2人の写真になった。

気楽に sailing

「……えつと、ダイヤ？説明頼んでもいい？」

「もちろんですわ。そもそも、最初は私から説明させてもらおうと思っていました。千歌さんではニュアンスさえ伝わるか不安でしたから」

「2人ともひどいよー！ひーちゃん、ほんととは分かってくれたでしょ!？」

「どこにそんな確信出来る内容があったの。私は千歌の幼馴染だけど翻訳機じゃない」

なおも叫ぶうるさい千歌を無視し、ダイヤが分かりやすく説明してくれた。伝わらない言葉だったという訳ではなく、千歌の説明じゃ私へと要求する合理的な理由が無かったわけである。「ひーちゃん音楽の成績良かったでしょ？じゃあお願い！」で伝わるほ

ど頭は柔らかくないのだ。

なんのことは無い、冬に向けてデュオトリオの楽曲を制作するにあたって、私に作詞の手伝いをお願いしたいとのことだった。そもそもいつも千歌の作詞を手伝っていた手前、むしろやる気ではあったのだが――

「今回、それぞれで歌詞を考えることにしまして、曲はいつも通り梨子さんに担当していただくことになっています。ですがそれだと、曜さんが1人で詩を考えることになってしまいますから……」

「つまりは梨子の分、私が作詞すればいいってことね。最初からそう言ってよ千歌」

「言ってるつもりだったもん」

「はいはい、つもりだから駄目だって言ってるの。恋の歌だっけ？ だったら大丈夫、梨子の気持ちちは分かってるし」

「ちよつと陽菜ちゃん……！」

慌てて私の口を塞ごうとする梨子の頭を撫でて慰める。作曲の負担がある分、こういう所は私でも出来るんだから気にしないでほしい。顔を赤くしながらも甘えるような表情。梨子の親友として、そんな顔を見られるのはとても嬉しい気持ちでいっぱいだ。

「無理はしないでね、梨子。曲作りなら私も出来るし、倒れたりなんてしたら怒るから」
「うう………そういう頼もしいのは嬉しいし好きなんだけど………陽菜ちゃんがそうやって

圧かけてくると怖いからやめて欲しいかなって……」

「約束しようね、じゃあ。私でよければ気分転換に付き合おうし、いつでも癒してあげるから」

「陽菜ちゃん……」

「はいはい、なあに？」

「放課後付き合って欲しいです……」

「ん、任せて」

スリスリと猫のように私を抱きしめる彼女。放課後付き合ってと言ったって、どうせ

砂浜を歩いたり音楽室でダラダラ話すだけだ。この時期はもう肌寒くなり始めてきていて、寒さに慣れない梨子のためにパーカーが1枚、私のカバンには常備してある。ちなみに私は既にカーディガンを着用している。寒いものは寒い。

もうすぐ冬が来る。ロマンチックな雪景色に思いを馳せ、私は恋の歌について考え始めることにした。

笑わないよ

スキンシップを滅多に取らない梨子ちゃんが誰かとゼロ距離にいるなんて、本当に珍しい光景である。それがひーちゃん相手だと言うのは何も珍しくないし、あんなに優しい顔をしたひーちゃんも珍しくない。2人は仲が良くて、だから何もおかしくないのに。

なんか、今にもキスしちやいそうなくらい甘い空気。
気に食わなくて、大気ない私は邪魔をしたくなる。

「ひーちゃんが手伝ってくれるなら百人力だね。これは感謝の気持ちのハグ、嫌なら突き放してもいいよ?」

「ちよつ……!! 曜ちゃん、私が断れないの知ってるでしょ!!」

「なんかいい匂いするね、眠くなる感じの」

「あ、分かるかも。落ち着くつて言うか、陽菜ちゃんらしい匂いだよね」

「ねえ梨子？仕返ししてるのか知らないけどさ、助けてくれても……」

梨子ちゃんを抱きしめてたその背中に、私もピッタリとくつつく。同時にパツと梨子ちゃんは離れてしまって、小さな対抗心は行き場を失ってしまう。でももつたいないし、このままで。

しばらくそうやって何気ない会話を広げていると、今日はこのまま分かれて作業することになった。つまり私はひーちゃんと2人きりで作詞。家に帰ってやってもよし、空き教室を借りてもよし。ダイヤさんからは特に指定は無かったし、ひーちゃんのお家にお邪魔するのが一番早いかなって思ってたんだけど。

「梨子、音楽室でいい？」

「え？いいけど……いいの？せっかくなのに」

「あのねえ……梨子が無理をしないように隣で作曲を手伝いたいの。それに、私が歌うわけでもないんだから、詞のテイストを勝手に決めるわけにいかないでしょう」

「……ひーちゃん、真面目だねえ」

「そりゃあね。2人の曲、楽しみにしてるから。出来ることなら全部手伝いたいんだけど……オーバーワークってダイヤに怒られるだろうから」

あ、ほんとだ。あからさまに浮かれたように頬が緩んでいる。今すぐにもピアノを弾きそうなくらい、ニコニコして音楽室に向かつて歩き出す。誰かの前を歩くことなんて滅多にないのに、楽しみが原動力になっているんだろう。可愛い。

「……陽菜ちゃん、先に行っちゃったね」

「そうだね、鍵を借りに行ってくれたのはいいけど、それくらい私が行くのに」

「曜ちゃん、ヤキモチ伝わってないと思うよ？」

「ひーちゃん鈍いから。でもいいんだ、諦めないから」

「……ふふ、本当に好きなんだね、あの子のこと」

「もちろん、大好き。梨子ちゃんには負けないかんね」

「応援してる。私のためにも、頑張ってるね」

「へっ?」

可憐に笑う梨子ちゃんは、夕焼けと相まってどこか消えてしまいそうな美しさがあつた。その光景に言葉を失っていると、誤解しないでねと彼女は言う。何か誤解するような事があつただろうか。

「確かに私は陽菜ちゃんのこと大好きだけど、恋人になりたいとは思わない。私たち、親友だからね」

「じゃあ……」

「私ね！善子ちゃんのことを好きなの。陽菜ちゃんのことを好きなの、善子ちゃんが」

「……そう、だったんだ……」

「うん。だから、私は曜ちゃんと陽菜ちゃんのこと応援してる。あの子に傷ついて欲しいわけじゃないけど……善子ちゃんは聡い子だからね」

「ごめん。私、無神経すぎたね」

「気にしないで。でも曜ちゃん、もっと強引に行っても陽菜ちゃんは逃げないよ？」

今日一番の刺さる一言。曖昧に言葉を零し、それから頑張って見るとだけ伝えた。満

足そうに笑う彼女はやつぱり綺麗で、なんとも言えない絶妙な気持ちだけが胸に浮かび続けている。

音楽室が近づいてくる。私とひーちゃんと、そして梨子ちゃんの時間が始まる。私の気持ちと梨子ちゃんの気持ち、そして代わりに書き上げるひーちゃんの気持ち。

どうか自惚れではありませんように。祈りながら私たちを呼ぶ声に振り向いた。

頑張ったと言えるように

曜ちゃんと呼ぶ甘い声に、どうかこれが夢ではありませんようにとただ祈るしか出来ない。私の上に覆い被さる小さな影は真正銘彼女の影で、その顔はすぐ近くにある。そんな不思議な状況なのに、私の頭はやけに冷静に物事を考えていく。

耐えられない。その頬に手を伸ばし触れて、顔を近づけた。私のもとの彼女の唇が触れ合いそうになったその瞬間、強い衝撃を受けた。

「曜ちゃん、起きて。朝だよ」

「……ひーちゃん……？」

「ご飯の用意出来ただけど……もう少し寝ていたい？」

「んー……」

「起きるのが遅いの、珍しいね。いつもならこの時間には起きてくるのに。曜ちゃん、甘えんぼさん？」

優しい声に、ポーツとしていた頭は次第に覚醒し始める。同時に、先程までの情景が夢だったことを知ってしまうのは残酷である。しかしまあ、目の前に本物のひーちゃんが居て、その彼女が私を起こしに来てくれた。そんな幸せが現実なら、夢の中でキスをしそびれたことくらい忘れてやろう。真正面から顔を見れなくなってしまうたけれども。

寝ぼけているということにして、ひーちゃんの腰を抱き寄せた。膝に頭を乗せて、彼女の言う通り甘えてみる。これは少し恥ずかしいけれど、柔らかい匂いに包まれていると羞恥心も吹き飛んでしまいそうだ。

「ひーちゃん、細いねえ……」

「そんなことないよ。ほら、曜ちゃん、起きて」

「いえっさ〜」

のろのろと体を起こし、それから思い切り伸びた。七海家のご両親は昨晚から留守に
して、今は泊まりに来た私と家主の一人娘のひーちゃんの2人だけ。勝手知ったる
何とやらで私は廊下を歩き、それから顔を洗った。どうか顔が赤くなっていませんよう
に。

「……うん、美味しい。ひーちゃんはやっぱり料理上手だね」

「はいはい。起きてからずつとお世辞ばかり。曜ちゃんがモテる理由分かった気がする」

「何それ。私言うほどモテないよ？」

「女の子が可哀想。まあ、モテないって思ってるならそれでいいかな。私は身近にいる曜ちゃんのが好き」

「……ひーちゃん、まだ寝ぼけてる？」

「どうかな。ほーら、冷めちゃうよ」

明らかにほーらかされた。そう分かっているけど、言及は出来そうにない。私がへたレつていうのもあるんだけど、嫌われたくない気持ちや、悲しそうな表情に驚いたつていうのもある。

ひーちゃんの作ってくれた朝食のお礼に洗い物を済ませ、それから泊まりがけで遊びに来ている本題に取り掛かる。そう、冬のデュオトリオの歌詞作りだ。

本来なら梨子ちゃんにも参加してもらうのが理想なのだけれど、作曲が煮詰まってるらしい。それを聞いてそっちを優先してと言ったのは確かひーちゃん。2人の友情は少し羨ましいものがあるんだけど、きつとそれはひーちゃんも私たちに感じていたもの。だから私にとやかく言える資格はない。

「冬のワードは入れたいから……雪や白、とか？」

「恋の歌だもんね、空模様とか書ければいいんだけど……難しいね」

「歌割りとかはともかく、詩だけ完成させちゃう？それともいつそ、Aメロを曜ちゃん、Bメロを梨子みたいな。作詞ごと分けちゃうのは？」

「いいねえ。それぞれで歌う気持ちは違うけど、感じることは同じだから……1回それで書いてみようか？」

「分かった。梨子の歌詞は好きなように書いてつて言われてるから、こっちは安心してね」

「おっけー」

彼女は氣づいているんだろうか。私が書く誰かへの気持ちだが、自分に向いていることに。

梨子ちゃんの代理で書くひーちゃんの詩は、誰に宛てるものなんだろう。私だといいな、そんなのもきつとまた夢に過ぎない。

決めた。ちゃんと告白する。これが終わった後でもいい。いつになるかは分からないう。だけど伝えないうまま、ひーちゃんが誰かと結ばれるのは嫌だ。

覚悟を決めて、手元のノートへと向き合った。慣れない作詞も、大好きな人と一緒にらきつと上手くいくはずだ。無駄に逸る鼓動をどうか、彼女が聞いていませんように。

想像以上のトキメキへ

「ん〜、やっと終わったー！」

「お疲れ様、曜ちゃん。梨子も」

「陽菜ちゃんもありがとう。歌詞、私の思ってることでビックリしちゃった」

「曲も完成したし、あとはライブまで完成度あげるだけだね！」

「あつ、曜ちゃん、陽菜ちゃん！ごめんね、ちよつとこの後用事があつて……」

「気にしないで、また明日ね」

「また明日、梨子ちゃん」

元氣よく手を振つて梨子を見送る曜ちゃん。それに習つて私も小さく手を振つた。ここ数日ずつと一緒に曲を作り続けていたから、このまま解散するのが何だか寂しい。そんな気持ちを知つてか知らずか、曜ちゃんは爽やかに笑つて私の手を取つた。

「この後、時間ある？」

「うん、大丈夫」

「ちよつと2人で話さない？遅くなる前に送ってくからさ」

「……私も、もう少しいたいなって思ってた」

そう答えると、彼女の頬がほんのり赤く染まった。冬の風は刺さるような寒さがある。

思わず身震いをする、曜ちゃんが私の肩に上着をかけてくれた。

「曜ちゃん、私カーディガン着てるから」

「いいの、気にしないで。寒いでしょ？」

「……曜ちゃんは寒くない？」

「平気、鍛えてますから」

砂浜にタオルを敷いて、2人で並んで座る。いつもよりもっと近くに感じる曜ちゃんの体温。ロマンチックでもなんでもない海のくすんだ色を感じさせないくらい、鼓動が高鳴っていくのが分かる。

「……あのね、ひーちゃん」

「なあに？」

「ずっと言いたかったことがあって、でも私、勇気なくて逃げてて……ほんとは今でも、ちよつとだけ怖いんだ」

「うん」

「少しずつ、伝えていくからさ。全部聞いてくれるかな？」

「うん、聞くよ。大丈夫」

「……好きだよ、ひーちゃん。大好き」

「……え？」

驚く私を置き去りに、彼女は淡々と告げていく。

誰よりも優しいところ、冷静にいられるところ、私より小さいところ、綺麗な髪、澄んだ瞳、その笑顔、色んな表情。

全部が好きと、曜ちゃんは幸せそうな顔で告げた。

「ま、待つてよ曜ちゃん！」

「そういうところが大好きなんだ、ひーちゃん」

「~~~~っ!!」

「キャパオーバー？えへへ、実は私も。だからね、ひーちゃんの気持ちも教えて欲しいな？」

「……そうやって、余裕のありそうなところ。動くのが好きで嬉しそうにダンスしてるところ、飛び込みのときの表情も好き。でも一番は、その目に私だけが写ってる時が一番好き……っ」

「……余裕なんて無いよ。こんなに可愛いひーちゃんの前で、あるわけない」

「私も、曜ちゃんの全部が好きだよ。お揃い、……勇気を出してくれてありがとう」

綺麗な瞳からは今にも涙が零れてきそう。かく言う私も、きつと似たような顔をしているんだろう。抱きついてきた曜ちゃんを受け止めて、それから抱きしめ返した。あつたかい。私にはもつたいたくないくらい優しく、手離したくない温もり。

「私で、いいの？」

「ひーちゃんじゃなきやダメ。ずーつと好きだったんだよ、ひーちゃん以外なんて、考えたことない」

「曜ちゃん……」

「ひーちゃん……ううん、七海陽菜さん。私と、付き合ってください」

キリツとしたその表情に胸がときめいた。最初から選択肢はたった一つ。

「喜んで……っ」

差し出された手を取って、2人砂浜に沈んでいく。砂の冷たさも汚れることも、けたましい波の音だつて、もう何も気にならなかつた。